

2018 - 04 - 30

東京五輪と景観

藤澤 和
日本景観学会長 / 景観問題研究所長

[日本景観学会ホームページへ](#)

1 西欧の景観、日本の景観 ——文明文化的に一流とは

かつて1978年にマドリ（スペイン首都を地元の人々はよくこう呼ぶ）に住んでいた時、中古車（SEAT-1600）を買い、西欧の風土を学ぶべく、1ヶ月間の旅に出た。

先ずスペインの先進都市バルセロナへ入り、ピレネーを超え南仏の田園都市を見聞し、イギリスへのドーバー海峡を船で渡り、オックスフォードからケンブリッジまでを散策し、オランダの堤防を走り、デンマークの最北端まで、氷が降る中を無事に進み、スイスへと入った。グリンデルワルドからツェルマットまで進み、ドイツのキームゼー湖を散策し、オーストリアのウィーンの城を拝観し、イタリアへ入った。フィレンツェとローマを覗き見て、スペインへ帰った。その間の走行距離は12,000kmであった。

その結果として、日本は一流国を誇ってはいるが、それは科学技術立国であって、文明文化的にみれば、今や二流国であるという自覚を持たざるを得なくなった。その最たるものが人為的な景観である。即ちそれは“電柱・電線”の存在であるという結論を得るに至った。

2 日本の無電柱化の遅れ

2020年、東京五輪が開催されることになった。それに伴って都は電柱の地中化を推進すると言う。まことに結構なことだと思っている。



日本の風景（泉岳寺前）。どこを見ても電柱、電線……（2017年）



やがて環境整備が進むであろうベトナム（2012年12月）



電線の地中化が進む韓国（2014年4月）

というのは、日本における無電柱化は、「景観学」にとって永遠の悲願であったからだ。日本の無電柱化達成率は、2016年時点で、東京23区8%、大阪6%（国土交通省HPより）に止まっており、景観学的にみても、美的観点からみても、青少年の精神教育環境学的にみても、大変大切な課題であると思っている。

だから、いずれ誰かがそこにメスを入れ、解決せねばならない課題だと思ってきた。この課題を、国際的に見ても、フランス・ドイツには及ばないとしても、ベトナムには遅れをとりたくないし、お隣の韓国にも負けたくない。今の日本列島で大変大切な課題だと思っている。ちなみに、無電柱化達成率は、フランス・パリ100%、ドイツ・ハンブルグ州95%であり（国土交通省HPより）、ベトナムや韓国では無電柱化が急速に進められている。日本は本課題をクリアしない限り、景観的にみて一流国にはなれない。

3 コストの問題

そこで、何故この問題が日本では立ち遅れてきたのか、現場で担当者には問えば決まって異口同音“コスト高”を主張する。確かに、現在見積もらせると高価格になるかもしれない。されど、いまなせねばならないことは〈コンセプトを確立〉し、当該の関係地域で〈民主的に議論〉し、〈決定する〉ことだ。さすれば、工事実施事例も増え、試行錯誤もされ、コスト面でも、施工工事手法や技術面でも、よりベターな工程管理が形成される。そうすれば経験も、実績も、賛同も得られて地中化は好転してゆくものと確認している。

4 空間を守る ——電柱は地下に

ではどうしたらよいのか——。それには先ず、哲学的にみたコンセプトの確立が必要となる。いま人類が住む地球環境からみて、地表は非常に大切な部分でもある。そして、今後はその上に存在する

空の空間も非常に大切な部分で、すなわちそこは太陽の恩恵を直接的に受け取れる有り難い場でもある。だから我々人類は、有史以来、脈々としてこの恩恵を享受しながら、その摂理を守り尊重してきたともいえる。

一部の人類が勝手気ままに電線を張り巡らし、住み易くするためとの大義のもと、電化製品を使いまくっている姿は異常ともいえる。

長い間、この地球環境の中で無事に生きてきた人類は、いまだ“空”空間の構築物に慣れているとは限らない。時には違和感や、特に幼児期や、病気で弱体化している時等に影響を受ける。見た目には良くても、脳機能的には異常な刺激を受ける場合もある。すなわち情緒不安定になったり、病気になるきっかけの場合が潜んでいる。

さて、以上を景観的に纏めてみると、よき景観とは“あるべき物が、あるべき所に、あるべき量があること”としている。すなわち、地上における「彼ら」の存在は在ってはならないものなのだ。では、この大切な物は、どこに位置すればよいのか、それは全ての動物達が情報伝達網のインフラを守っているように、自己の体内に位置させる、すなわちそれは地下空間となる。

Profile

日本景観学会長
景観問題研究所長
藤澤 和 氏
FUJISAWA Kazu

1939年、長野県伊那谷に生まれる。1963年、明治大学農学部卒業。造園学を丹羽鼎三に、農業土木学を田村徳一郎に、農村計画学を浦良一に学ぶ。1978年、スペイン留学。1989～2010年3月、明治大学教授。1994年4名で「景観問題研究会」を設立し、5年間共同研究後、1999年「日本景観学会」設立。2016年、第4代会長となる。

